

2017サークルステーション IN 三条 を開催

大学今出川校地学生支援課

同志社大学は昨年9月16日に、京阪電車三条駅にて京阪ホールディングス株式会社との連携イベント「2017サークルステーションIN 三条」を開催した。本学と京阪ホールディングスは、同じ京都に拠点を置く大学・企業として、地域活性化および学生の社会参画活動による情報発信の強

化に共に取り組んでおり、本イベントはその活動の一環として2010年より毎年開催している。

8度目の開催となった今回は、海外公演などで活躍する同志社グリークラブの他、同志社女子中学校・高等学校マンドリンクラブ、同志社香里高等学校吹奏楽部などが日頃の練習の成果を披露した。また、鉄道同好会が鉄道模型展示と運転体験を実施するなど、法人内の合計9団体が参加し、

それぞれのパフォーマンスで道行く人々を楽しませた。

台風が接近しており、天候が危ぶまれる中での開催となったが、延べ2400名という多くの方々に足を止めてご覧いただき、イベントは盛況のうちに幕を閉じた。多くの方に同志社をアピールする機会であ

あるのと同時に、学生・生徒にとっても特別な場所での自身の活動を披露することで大きな刺激を受けられる貴重な場となっている。大学の枠を超え、学校法人同志社としての一体感を持った貴重なイベントとして、今後も継続して開催していきたい。



應援團吹奏楽部のパフォーマンス



鉄道同好会の鉄道模型展示、運転体験

中高ダンス部共にV奪回

香里中学校・高等学校教諭 ダンス部顧問 ^{ひがしく ぼ あ い み} 東久保愛美

昨年の夏、ダンス部として大会に出場するようになって10回目となる節目の夏を迎えました。そんな夏に挑むのは、全国の高校ダンス部が目標とする大会『日本高校ダンス部選手権』です。実は大会も第10回の記念大会ということで、なんだか不思議な縁を感じながら、高校3年生にとって最後の大会に挑む日々がスタートしました。

私たちダンス部は、研究会を立ち上げた当初から、生徒たち自らの力で作品を創作することにこだわってきました。どんなに時間がかかっても、生徒たち自らの力で作り上げることに意味を感じてきました。

しかし、昨今ではプロのダンサーコーチが技術はもちろん作品を作るのが当たり前になってきて、なかなか努力と結果が結びつかない苦しい時期がありました。

ですが、ダンスは、勝つことよりも大切なことがあります。誰かに勝たせてもらう経験よりも大切

なことがあります。

高3の生徒たちは最後の大会作品を創作する中で、あるピアノの音楽に心を強く動かされました。その時に生徒が表現したいと感じたテーマは『黒薔薇』でした。黒薔薇を表現するキーワードに『荊棘』という言葉を選びました。『荊棘』とともに身に受ける苦難のたとえの意味があります。人は誰しも、『荊棘の道（困難や障害がある道）』を歩む時があります。高校生の自分たちにも、自分の気持ちに負けそう、立ち止まりそうになる瞬間がいくつもあります。

荊棘の道に立つ。そんな



高校生



中学生

時、一步を踏み出す強い心を持っている人でありたい。そんな生徒の熱い思いが作品に込められました。

その熱い思いが審査員の方に届いたのか、記念すべき第10回目の大会で優勝することができました。

また、千葉県浦安市の舞浜アンフィシアターで行われた中学校ダンス部の日本一を決める「第6回日本中学校ダンス部選手権」の全国決勝大会で中学生も優勝を果たしました。

ですが、勝つことよりも大切なこと：部活動を通じて培うべき自主性と創造性、そしてコミュニケーション能力。それがいつか社会に貢献する人間力として活かされていく日がくることを願いながら、

今日も生徒たちの練習を見守りたいと思います。

短歌の創作
—韻文の表現に親しむ—中学校・高等学校教諭 ^{むらかみじゅん} 村上準

詩や短歌といった韻文によく使われる表現方法、といえど皆さん何を想像されますか。倒置法、体言止め、比喩 etc... かつて学校で習ったことばが、ぱっと思い浮かぶのではないかと思います。

今の中学生も表現技法の名前をたくさん知っています。教科書に出てくる短歌を例に挙げて、金色のちひさき鳥のかたちして銀杏ちるなり夕日の岡に

与謝野晶子

「この歌に用いられている表現技法は何でしょうか？」と問いかけると、お茶の子さいさいと「倒置法！」という正しい答えが出てきます。

しかし、「では、なぜわざわざ倒置法を使っているのでしょうか？」と尋ねると、火が消えたように答えが出なくなります。表現技法は試験で聞かれるから覚えてある。しかし、何故それを用いて表現しようとするのか、ということとまで踏み込めていない、これが

私の感じた問題意識でした。ですから、短歌を創作する前に、いろいろな表現について理解を深めていくことにしました。

話し合いを進める中で、面白い意見がいくつか出てきました。例えば、「体言止め」について、「文章はふつう、名詞で終わらないから、何か続くような感じ（余韻）が残る」や、文法の知識をもとに「名詞は『ものの名前』で『活用がない』だから、そこで時間が止まる」といった発言がありました。

このように、表現を工夫することの効果や面白さを共有したあとで、短歌の創作に移りました。短歌では作者の気づきや感動、情景を歌に詠みます。子どもたちには、自らの気づきや詠みたい気持ちを大切にしておいた上で、気に入った情景を一枚写真に収め、そこに気づきを詠み込んだ短歌を載せる「フォト短歌」を制作する課題を与えました。皆自由にのびのびと作品をつくっていました。



生徒作品の一例

ことばの使い方に気を配っている作品が特に多くみられました。文字を小さくすることで寂しい感情を表すものや、上の句を韻文的に、下の句をあえて散文的にしたもの、慣れない文語体にチャレンジしたものなど、面白い作品が数多くありました。自分なりに考えて表現し、それを友人たちと見せ合うなかでお互いのアイデアを参考にすることが印象的でした。

同志社女子中高の語学研修
プログラムについて

女子中学校・高等学校教諭 吉永真

本校には、高校生対象のイギリス語学研修と、中学生対象のオーストラリア語学研修がある。

イギリス語学研修の研修地モーパーンには保養地としても名高く、緑豊かな平原が広がり、優雅でゆつたりとした時の流れを感じながら研修が行われる。英語の授業はクラス7〜8名の少人数で展開され、講師に加えイギリス人の学生達がサポートで加わり、まさに英語漬けの環境の中で、イギリスの文化や歴史などについて学ぶ。観光を含む様々なアクティビティにも同行し、シェイクスピアの生誕地ストラットフォードや世界遺産のバースをはじめとする観光地について、生徒達は彼らと課題に取り組みながら理解を深めていく。一日の最後はホストファミリーとの団欒となり、参加生徒は常に英語でコミュニケーションを取る環境に恵まれる。

オーストラリア語学研修はシドニー郊外で実施され、午前中は英

語の授業を受け、午後からはバディと呼ばれるパートナーと現地校の授業に参加する。シドニーやブルーマウンテンなどの観光に加え、小学校の訪問もこのプログラムの特徴である。小学生が準備してくれたオーストラリアを象徴するダンスやスポーツなどの文化紹介と、本校生徒による日本文化の紹介を経て、異文化交流が盛んに行われる。多民族国家という背景の中で、ホストファミリーのルーツも様々であり、彼らとの関わりの中で、違いを受け入れ、異なる英語に触れる、そうした異文化理解も大きなテーマとなる。



イギリス語学研修



オーストラリア語学研修

体感し研修を終えるのである。2018年3月より、中学1年生対象の国内研修「スプリングイングリッシュキャンプ」を新たに実施する。研修には、「コミュニケーションの楽しさの実感」、様々な国籍の講師陣との交流による「異文化理解」、英語漬けの環境の中での「英語発信力の育成」という3つのテーマがある。本校で6年間学ぶ上で、視野を広げ、物事を多角的に見る力を身につける、その一助となればと期待している。

クリスマス礼拝、祝会を通して
～幼稚園の教育～

えんどう ち え 幼稚園教諭 遠藤稚絵

幼稚園ではキリスト教主義に基づき、自然を友とし、自分も他者も愛される存在として思いやりをもつて接することのできる豊かな心が育まれるよう教育活動を行っています。礼拝に始まる一日の中で、子ども達は神様を身近な存在として感じ、純粋な祈りを捧げています。また、四季折々の行事をはじめ、園児が自分たちで何か人のためにできる活動を設けています。例えば、社会貢献活動、美化活動、慰問などです。自らが様々な人のぬくもりに触れ、成長していることに気付き、感謝する機会となっています。

12月13日（水）（於…同志社大学寒梅館ハーディーホール）、本園はクリスマス礼拝・祝会を行いました。クリスマスは子どもたちにとって、最も大きな行事です。礼拝では、年長組は降誕劇、年中組は聖歌隊、年少組は羊や星として降誕劇に参加するなど、各学年が役割を持ち、みんなでひとつとなつてイエス様の誕生をお祝いしました。（巻頭「口絵」参照）

祝会では、全園児によるオペレッタに挑戦しました。本番では、舞台の上で教員が子どもを手助けすることはできません。臨機応変に対応していける力、自ら考える力、「できない」ではなく、失敗してもとにかくやってみようとする気持ちとを大切に取り組みました。園児は、まずは「面白そう」「やってみたい」という関心・思いが「意欲」となり、主体的な活動の源となっています。心情、意欲があつてこそ、子どもたちの集中は素晴らしく、教員の「静かにしましょう」「話を聞きましょう」といった注意の言葉が不要になるほどです。もちろん、興味や集中時間には個人差がありますが、すが、友達のがんばる姿を通して、自らが良いと思える態度や行動を考えることにもつながっています。



しましたが、子ども同士で声を掛け、助け合いながら懸命にやり切ろうとする姿に、成長をみることでできました。そして、客席から届く沢山の拍手や、お家の方からの温かい声援により、子どもは取り組みの意味を感じ、人とのつながりを肌身で感じることでできました。みんなで力を合わせ、1つのオペレッタを作り上げた喜びは、達成感として心に残り、次への一歩踏み出す力になったと思います。本園は、今年度創立120周年という節目を迎えました。今後も、一人ひとりを大切に、神様に愛され、子ども達が豊かに育ち合う幼稚園でありたいと思います。